

(合評)

ベルクソンと現代時間哲学 (下)

平	井	靖	史*
青	山	拓	央
岡	嶋	隆	佑
藤	田	尚	志
森	田	邦	久

以下は、2020年11月21日にオンラインで開催された、ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度』（藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳、書肆心水、2019年）の合評会の記録の後半である。会の主旨については重複になるため、前号掲載の上篇を参照していただきたい。

下篇である本稿では、セッション2と全体討論を収める。セッション2では、森田邦久氏（大阪大学）からのコメントに対して、岡嶋隆佑氏（新潟大学）と平井靖史（福岡大学）がそれぞれ応答している。全体討論では、青山拓央氏（京都大学）および藤田尚志氏（九州産業大学）が加わり議論を行なった。当日は、この後に会場との活発な質疑応答があり重要な議論も展開されたが紙幅の都合により割愛した。

セッション②

コメント 単純なものとしての時間科学的時間 森田邦久

○藤田 では再開したいと思います。続きまして森田先生からコメントをよろしくお願いたします。

○森田 大阪大学の森田です。お話しさせていただきたいと思います。

僕が今回注目したいのは、時間が、初めのほうで単純なもの、複合的なものという話

* 福岡大学人文学部教授

があったと思いますが、それについてコメントしたいと思います。

時間が「単純」であるとはどういうことか

単純、複合的というときに、記号で表現されるかどうかという話もベルクソンは割としていますが、最初のほう、87 ページのところ、「時間とは、その本質からして、記号的に表現されえない、純粹な諸概念によって表象のうちに収まりえない何かであって、そこから予見しうることは、時間をその種の表象に閉じ込めようと試みたり、その種の表象に従属させようと試みたりする哲学者は、乗り越えがたいさまざまな困難に遭遇するであろうということですよ」と書いてあります。

まさに今、分析系の時間論はそういうことをしようとしていて、ここ 10 年とか 20 年で、すごく分析的時間論は発展していて論文がたくさん出てきているのですが、それと同時に袋小路に陥ってきている感覚も何となくあります。それは結局、先ほど青山さんのコメントでも、時間を語るのが困難だというお話があったと思いますが、そこにも通じるのかと思いました。

そこからだいぶ後の 249 ページですが、「私たちの持続とは単純で不可分なもの、実在そのものであるか、あるいは直観のうちでそれに肉薄することを諦めなければならないかのどちらかだということです。困難のすべて、ほとんど不条理と言っているものすべては、ここ、ここというのは持続を多様な部分から構成させるものとみなすことですが、ここから来ています。それは不可分の全体であって、いわゆる部分と称されているものは、構成要素のようなもの、翻訳の際に見られる記号的要素のようなものであるか、あるいは流れの連続性の上にとびとびに取られた不動の眺めであるかのどちらかです」とベルクソンは述べているのです。ゼノンのパラドックスもこういうところから来ているのだというのがベルクソンの主張だったと思います。

時間を複合的なものと見なしているのが、まず一つのベルクソンの指摘する問題点です。もう一つ、ベルクソンは時間の空間化という問題点も指摘していますが、この点は哲学的に時間を考えるときに困難に陥るのはなぜなのかということと関係します。

思わずいきなり本題に入ってしまいました。本書全体に関する感想も述べておきましょう。もともと僕もベルクソンに興味があって、平井さんと知り合ったのも僕の方からベルクソンの研究会に行って平井さんに声を掛けたのですが、ベルクソンの本をきちんと読んだのかと言われると、『物質と記憶』は挑戦をしてみたものの、途中で難し

く挫折してしまった経緯がありました。今回このお話を頂いたときに、気軽に承諾したものの、そういう過去があるので、大丈夫か、これをきちんと読めるのかと思ったのですが、読んでみると、青山さんのコメントにもあったのですが、非常に分かりやすく、もちろんそれは訳者の方々の努力のたまものでもありますが面白かったです。大体ヘーゲルとかもそうです。『精神現象学』とかはめちゃくちゃ難しい、何を言っているのだろうと思いますが、『哲学史講義』とかはすごく読みやすい。このように、講義は、ベルクソンやヘーゲルも分かりやすいのですから、それはつまり、わかりやすく書こうと思えば彼らもわかりやすく書けるのではないかという気がしますが、それは余談です。

また話を元に戻すと、講義の要約が今回の本の終わりに付いていて、そこでもこういうことが書いてあります。「ベルクソン氏が別のところで論じていることによれば、時間と空間の混同こそが自由の問題とエレア派のゼノンによる運動を否定する諸議論を生じさせている。彼はこの講義において、この同じ混同に端を発する新たな諸困難を挙げている。これらもまた時間と空間を丁寧に分けることで消え失せる困難である」。

本講義でもこういうことが書いてあります。「動くものは、空間内のさまざまな位置を占め、a、b、c、dといった特定の位置を通過します。時間とは、そういったa、b、c、dという諸点の継起そのものだと私は述べることになるでしょう。これが第二の虚構、時間に関する外的な虚構であって、それは明らかに諸概念に翻訳可能なものなのです。実際には、時間はこの第二の表象にはまったく介入してきません。実のところ、動くもののa、b、c、dという位置は空間内の点であり、空間の点である以上不動な点なのです」と書いていて、こども時間を空間に写し替えてわれわれは読んでしまっていることを指摘しているわけです。

ここで二つ、ベルクソンは指摘していますが、われわれは時間を語るときの問題点があります。まず時間と空間を混同してしまうこと、それから時間、もしくは運動という言葉でもいいと思いますが、時間もしくは運動を複合的なものとして捉えるという2点があります。この二つがそれぞれ別の問題なのか、根は同じものなのかがまず一つの疑問点です。ベルクソン自身は、イコールだと、同じ根のものだとは述べていないですが、本書を読む限りはそう思っているように見えるということです。

実は時間は単純なものである、不可分なものであるという考え方は、僕もベルクソンの話とは独立にずっと気になってきたことですが、僕の思考は逆で、むしろ時間を単純

なものと捉えることは空間化することなのではないかと思います。そのことについてお話しする前に、ベルクソンの近代科学の評価に関する疑問点について少しお話ししたいと思います。

近代科学の時間をどう評価するか

今回の本を、先ほどずっと中心的に話題になったプロティノスの話とか、そういうのも非常に面白いのですが、僕自身としては、近代科学的な時間をベルクソンはどう評価しているのかを気にしながら読んでいました。こちらに少し先入観があって読んでいるから、つかめなかったところもあるのではないかと思います、いまいち分かりませんでした。何となく本書を読む限り、動力学は持続を扱っていると評価しているのかと読めてしまいました。それに対してギリシア科学のほうは静的だと言っています。引用部分ですが、「ギリシア科学を見れば明らかだと私は申し上げました。それは静的な科学、きわめて正確な科学ですが」とあります。それは先ほどの記号という話につながってきますが、正確さを期すために静的に見るしかなかったという話だったのですが、ずっと時代が下って行って無限小解析などが導入されて、動力学が発展する過程を概観した後、ベルクソンはこう評価します。「科学は今や本質的に動的なもので、静的なものではまったくないのです」と、そうなのか、なぜそういう話になるのか、ここが分かりませんでした。

僕の感覚では、確かにアルキメデスとかは静力学ですが、アリストテレスなどはむしろ動的な側面に注目していて、そこから静的なものとして見るというか、空間化することによってガリレオの近代科学が成立したのではないか、むしろそう思うので、ここを読みながら僕は、たぶんベルクソンも、勝手な僕の先入観ですが、勝手にそういうふう近代科学を評価しているものだと思い込んでいたので、今回本書を読みながらこの部分を読んで少し驚いたのですが、どうなのでしょう。近代科学は時間を空間化していないとベルクソンは評価しているのでしょうか。この辺りはまた後で教えていただけたらと思います。

それで、先ほどの時間が複合的なものなのか、単純なものなのかという話ですが、僕は、まず結論を言うと、自然科学は時間を複合的なもので捉えていると思います。それは捉えてしまっているというよりも、捉えざるを得ないと僕は思っていて、それがずっと気になって、先ほども言ったように、ベルクソンとは別にずっと気になっていた話

で、ちょうど今回ベルクソンが時間を単純なもの、複合的なもので話をしている、そこは分かるというか、これも先入観で、僕が疑問を持っていたことに関連することをベルクソンが話していたので、僕の考えをそこに入れ込んで読んでしまっているだけなのかもしれないですが、共感しながら読みました。

自然科学は、基本的に世界を切り取ることによって研究します。自然科学に限らず、学問的探求は、結局そういうこと、形而上学もそういうことなのかと思います。それはどういうことかという、閉鎖系といわれるものの概念が成り立つということです。つまり、今研究したい、対象系という言い方をしますが、対象となっている部分をその周りから因果的に独立した局所的なものとして、ぶちぶちと周りとの関係を切り取って、それだけが孤立したものとして取り出すことができ、そうした系は独立に調べることができます。もちろん、そこだけを切り取ることができるだけではなくて、ほかの部分も切り取ることができるのですが、それぞれのところで同じ法則が成り立っている、この前提が科学をやる上で不可欠なものだと思います。

これは、アインシュタインが量子力学を批判するときにそういうことを言っていて、ここの聴衆の皆さんの中で量子力学をどれくらいご存じかは分かりませんが、非局所相関という考え方があるのです。まさにここで今お見せしている赤字の部分とは逆ですが、系を分離できません。量子力学は、系を分離できない分離不可能性があるといわれているのですが、アインシュタインは、それに対して分離できなかつたらどうやって法則を見つけることができるのだと批判しています。それは僕もそのとおりで思っています。

実際に量子力学は、皆さんもご存じだと思いますが、いろんな解釈があって、僕は、量子力学を物理学の理論として見るためには非局所性とか分離不可能性を認めるような解釈は成り立たないのではないかと考えているのですが、とにかく自然科学の前提にはそういうものがあります。時間、世界を切り取るわけです。ただ切り取ることはできるのですが、時間的だけではなくて、もちろん空間的にも切り取ることができます。ここでは時間と空間は別に区別されていません。だから時間や空間を独立したものにしていきます。別々に分離できるので、そうしたものの複合的なものと見なすことができます。科学においては、時間だけでなく空間も複合的なものと見なすことができるのではないのでしょうか。

ここで先ほど言った時間を不可分なものとして見なす、単純なものとして見なすこと

は、むしろ時間を空間化することではないのかという話になります。もし運動が不可分で、なぜそういうふうに行くかという、先ほど空間も分割できるという話をしたのですが、それでも見ようと思えば空間に関しては分離できないかもしれません。自然科学を考慮に入れなければ、空間を不可分として見ることはそんなに難しいことではないような気がするのですが、どうでしょうか。

時間に話が行くと、一方で、もし運動が不可分なものであるとしたら一つの運動はどこからどこまでなのかという疑問が出てくるはずだと思います。それは、先ほどの切り取りの可能性も関係するのですが、ベルクソンは運動を単純なものとして見なすことによって、ゼノンのパラドックスも解けると言ったのですが、それはそのとおりだと僕も思います。先ほど平井さんが紹介してくれた『〈現在〉という謎』ではなくて、そのすぐ後に僕が単著として出した『時間という謎』で少し書いているのですが、むしろ時間を空間化することによってもゼノンのパラドックスで解けると思います。なぜかという、結局、それはベルクソンと同じように運動を不可分のものとして見なすからということです。

具体的な一つの運動とは何か

話が行き来して分かりにくくて申し訳ないですが、ベルクソンの場合は持続から出発しますが、持続から出発してしまうと、一つの運動、不可分な運動、単純なものとしての運動という見方ができなくなってしまうのではないかという気がするのです。どういふことかという、一つの単純なものだとしたら、一固まりの運動はどれを指すのかという問題が生じるはずで。

飛ぶ矢のパラドックスの話も出ていたと思いますが、矢が弦から放たれて的に当たるまでが一つの運動なのでしょう。それとも矢をつがえたところから始めて、的に当たるところまでなのでしょう。的に当たったところで一つの運動が終了と言っているのでしょうか、などという時間的な部分もあります。さらにそこも空間的にも捉えなくてはいけなわけです。矢だけに注目していいのでしょうか。弓も見なくてはいけなわけではないのでしょうか。弓を引いている人も考えなくてはいけなわけではないのでしょうか。不可分のものとして捉えるのはいいですが、そう捉えてしまうと、具体的に一つの運動は何ですかという話になると思います。

どこで切り取っても、結局、人間が勝手にここからここまでが一つの運動ですと言っ

ているだけになってしまうのではないのでしょうか。それは、先ほども少し言いましたが、空間にも言えるのでしょうか。どこで運動を区切っても恣意的であるのだとすると、結局、仮に宇宙が始まりがあるとすると宇宙が始まった遠い過去から、仮に宇宙が消滅するなら宇宙に終わりのあるという遠い未来までが一つの運動になるのではないのでしょうか。

これは横軸が時間だとして、宇宙がビッグバンに始まってビッグクランチで終わるとするなら、この時空で時間も一緒にずっと、こんな図は、ベルクソンはそれこそ空間化していると怒るかもしれませんが、こういうふうにして捉えるしかないのではないかと思います。もちろん宇宙が始まりとか終わりがない場合は、もっとびよーんと始まりも終わりも無限に広がっているようなのだと思います。無限を一つのものとして捉えるかどうかは問題だと思いますが、一つのものとして扱います。

そのように考えると、もしベルクソンの言うように持続が実在するのだったら、現在という時点でいったん運動が途切れて完結していないわけです。だから時間・運動が不可分であると言えないのではないのでしょうか。その時々複合的なものとして見えずしかないのではないのでしょうか。だから時間は不可分である、単純なものである、運動は複合的なものではなくて単純なものであることは、むしろベルクソンの意図とは逆に持続が実在しないことを結論するのではないのでしょうか。それを今風の現代の分析哲学の時間論的な言い方をすると、先ほど「A論、B論」という言葉が出ましたが、絶対的な現在が存在しないことになるのではないのでしょうか。

だから時間も空間と同様に、全体がぱんとあるわけです。全体がぱんと一度にあるというのはメタ的な言い方で、それぞれ時間は語れないという話と通じてくるかもしれませんが、時間も空間と同様に、ぱんと全体としてあります。僕たちは、現在、例えば話している今も、結局、空間における「ここ」と同じものでしかない、特殊なものではないのではないかと疑問が出てくるということです。

あともう一つ、先ほどの近代科学の評価のところの話にもう一度戻ると、空間には無限小はないが、持続にはあるという言い方をしています。「空間のうちには無限に小さいものはありえないからです。どんなに小さいものでもいいので、ある大きさを取り、それを半分に分割し、半分の半分を取り上げ、さらに同様に続けることはできますが、いつまでも変わらず無限小からはほど遠いでしょう。どれほど先まで行っても、そのとき辿り着いた点と到着したい点とのあいだには常に無限の隔りがあることでしょう。

こうして空間の観点からは無限小はありえないわけですが、しかし二つ目の観点があって、それは時間の観点、内的持続の観点です。持続のうちには無限小があって、しかも無限小しかないと言ええるのです。それは大きさ・量としての無限小ではなく、意図としての、強度としての無限小です」ということはあるのですが、後半部分は置いておいて、空間のほうはベルクソンの、これは1900何年でしたか、カントールとか……。

○藤田 1902年から1903年です。

○森田 あるかないか微妙な辺りで、僕も歴史的にカントールがいつぐらいかは覚えていないですが、微妙です。現代的な考え方だと、これは哲学でも今でも問題になっているのですが、物理的な世界に無限が存在するのかどうかは問題ですが、少なくとも数学的には現実無限を扱えるようになって、先ほど「宇宙は無限だとしたらそれは一固まりで」という言い方をしていましたが、無限がぱんと、だから既に前半部分が時間的な観点の入った書き方をしています。「どこまで分割していても」という言い方をしていますが、別に無限小が無限に集まって有限なものになるのは数学的にはおかしなことではありません。だから宇宙のうちには無限小がないというのは少し古いのかもしれないと思いました。

これはまとめ的な話です。一方で、時間と空間は違うと言いたい気持ちは、僕も「おまえは一緒だと思っているのか」と言われると、違うなと思います。私たちは運動を表象するとき、記号化、一般化している事態をベルクソンは「空間化」と呼んでいます。そして、その記号が科学にとって重要な反復を可能にします。先ほど言ったように、法則が可能になることはどういうことかという、次に書いてあります。

初期状態が同じだったら同じ状態変化をします。いつやってもそうです。今、ある閉鎖系を用意して、ある初期状態をそろえて5秒後にどうなるかを観測して、それからまた10年後に同じように同じ初期条件を持った状態にして、それが10秒後にどうなるかを見たら、確率的なものも含めて、全く同じ状態変化をしているはずです。そういうふうに来て、それが記号化、一般化するということではないかと思います。

これがあるからこそ法則が発見可能というよりも、そもそも自然科学にとってそれが前提です。法則という概念が可能になるための前提があります。それと引き換えに「この今」という特権性が失われます。でも「この今」は、宇宙の歴史において、全く同じ状態が仮に実現したとしてもただ一つしかないもの、この辺が僕はあまり自分の中で熟成されていないのですが、そう考えると、時間と空間は、科学的な見方では「この今」の

ような特権性を持ったものは、先ほども言ったように存在しません。

でも僕は自分でも今矛盾したことを言っているような気がしますが、なかなか難しいと思います。単純なものとして見てもいないし、複合的なものになってしまいます。自分でも今話しながら分からなくなってくるのですが、とにかく時間と空間は違う気がするのです。でもやはり、何遍も「でもやはり」という話になっています。

空間も各地点で均質的だという、だから地球上で実験をしても全く同じ条件であったら、重力は違ってくるので、何とかその辺の重力もうまく合わせてやって、月の上で実験をしても全く同じ結果になるはずです。本当にそれは均質で、それも結局、僕たちは自然科学の下でそう思い込んでいる前提条件にすぎないのではないかという気がします。

逆にいうと、空間はそうではなくて本当に記号化できるようなものです。たぶんベルクソンは、別に空間は記号化できてもいいのです。時間を記号化、一般化することによって空間化されるわけだから、でもそうだとすると、なぜ時間はそれができないのでしょうかというのも、最終的な、これはごめんなさい、事前に挙げた疑問とこの二つはお送りしたスライドになかった疑問かもしれないけれども、そういう疑問も付け加えてありました。僕からは以上です。ありがとうございました。

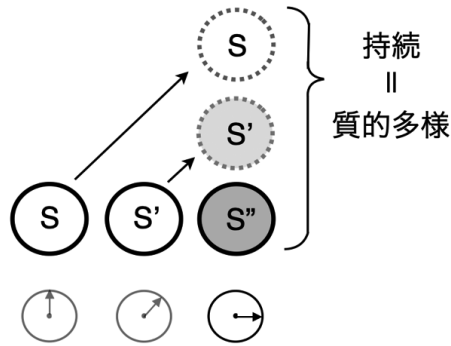
○藤田 ありがとうございました。では、森田さんのコメントに対するリプライを、青山さんに対するのと同様、岡嶋さん、平井さんの順番でお願いします。

リプライ 岡嶋隆佑

○岡嶋 では私から森田さんのコメントへのリプライということで始めたいと思います。私は講義録の内容というよりは、どちらかという、今回はベルクソンの哲学の観点からという形で幾つかご質問にリプライしてみたいと思います。

ベルクソンにとって時間・空間とは何か

概要としては、先ほどと同じで二つです。まず、そもそもベルクソンにとって時間や空間がどういうものなのかという大枠の確認をしたいと思います。その上で、この講義の固有の論点である、先ほどから何度か登場している、「運動の内部」という発想について、もう少し詳しく見ていきたいと思っています。



これは私が授業で使っている図です。『試論』の第2章で、ベルクソンは初めて持続概念を提起するわけですが、そこで持続や質的多様性を説明するときに私がよく使っているものです。一応注意しておく、ベルクソン自身は時間の意識を説明するのに、フッサールとは違ってこういう図はもちろん用いていません。森田さんの最初の引用でもあったとおり、こういうふうに書いてしまうと、どうしても時間を記号化してしまうことになるからです。とはいえ、理解のためには、私はこういう図が有用だと思ってよく使っています。

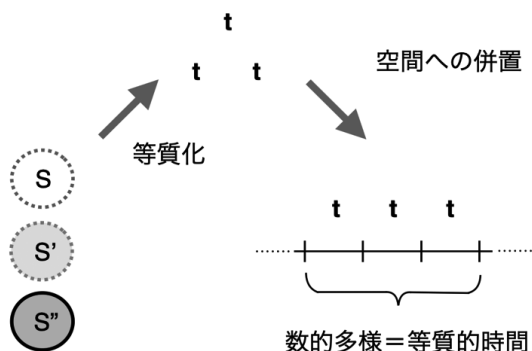
秒針だけの時計、ストップウォッチのようなものがあるとして、それがチクタクと音を鳴らしている場面を考えてみます。このとき、図の一番下の段、S、S'、S''は、それぞれが時計の針の動きに対応した音の感覚であるとしましょう。

時計が3時に相当する位置を指しているとき（図の一番右）、意識に与えられるのは、時計のチクタクのひとつの音の感覚S''だけではありません。なぜかという、SとS'という、それ以前の感覚の記憶も一緒に捉えられているからです。フッサールの内的時間意識の話を知っている方がいればそちらを思い浮かべてもらっても構いません。そうすると、図中右側の全体がベルクソンの持続として捉えることができ、これを彼は「質的な多様」と呼んでいます。

ここで一番下にあるS''は、今まさに聞こえている3時の方向を指している針の音ですが、それより前の記憶が持続の中には含まれているので、その現実性の度合いを表すために時間の様相の違い、現在とか少し前とかもっと前という違いを表すために濃淡で分けています。

すごく単純な図ですが、これらを一緒に経験することで、3回の時計の音を聞いたときに1回目を聞いたときとは違う独特の質感が得られます。そういった形の議論をベルクソンは『試論』の中でしていると私は考えています。

とはいえ、さきほども述べたように、これはもちろん事後的に再構成した図ですので、最初にわれわれの意識に直接与えられているのは、例えば3回鳴ったのだったら3回鳴ったときに聞こえる音の質感でしかないというのがベルクソンの考えです。だから、こういうふうな図にしてしまった時点で持続は空間化が完了してしまっています。



では、逆向きに持続から出発して、それを空間化するのはどういう働きかを見ていきたいと思います。一番単純なケースです。先ほど例に出した時計がまさに3回目に鳴ったときに、その瞬間に意識される音の質だけを考えてみても、それを反省すると、そこには図にあるような三つの要素が区別されるはずですが、この区別は時計の音の区別によって担保されています。

ただ、これらの要素には質的な違いがあります。先ほど言った現在とか少し前とかもっと前といった時間の様相の違いです。そうした構造をもつ持続を空間化するためには、まずはそれらの様相の違いを無視して、全く差異がない単位、「等質な単位」とベルクソンは呼んでいますが、これを構成する必要があります。これが等質化と呼ばれる働きで、便宜的にここに「t」と書きましたが、その後でそうして出てきた単位を想像上の空間の中に並べる・併置するというわけです。

この図の一番右下を見ていただきたいのですが、その後で私たちは、並べられた等質

的な単位をひとまとめに把握します。そのことによって、例えばこの場合だったら3という数が構成されます。これが『試論』の第2章でやっている議論のまとめです。持続は「質的多様」と呼ばれますが、それと対比的にこうして構成された時間は「数的な多様」と呼ばれます。これが等質な時間、空間化された時間と呼ばれるものです。もっと細かいお話はできるのですが、今回は前置きということなので、先に進みます。

こういう理解の上で森田さんの疑問のうちの最初のものにまず答えてみたいと思います。時間と空間の混同が、時間あるいは運動を複合的なものとして捉えることと一緒になのかというご質問についてです。

これがまさに今説明したことなのですが、持続は、ある意味複合的です。だから必ずしも持続と空間化された時間との混同は、時間を複合的なものと捉えることとイコールではないと、ひとまずはお答えできると思います。ただ問題は複合性、複合されているものの中身で、それがもう一つの論点です。持続の場合、要素が相互浸透しているのですが、先ほど紹介した数的な多様は空間の介在があるので、要素が相互浸透せずに相互外在的に置かれています。これが一番決定的な違いです。

不可分性という言葉の意味をこういった文脈から説明することもできます。二番目の図の左側を見てください。感覚と記憶によって構成されている持続を描いたものですが、図にしてしまうと、これらはまさに空間に置かれているので、分離した形で捉えられてしまいます。けれども、実際に音を聞くという場面を考えると、今まさに聞こえている音のチクタクという感覚とその前の感覚と一緒にあって与えられます。ちょうどメロディーのように一緒にあって与えられますよね。だから、例えば一番下にある感覚S”は、実際にはその他の感覚の記憶から分離して考えることができません。これを「不可分性」と、ひとまずは呼ぶことができると思います。

要約すると、時間が複合的なものではないということではベルクソンが言いたいのは、数的な多様性の構成要素、線によって表せるような空間に並べられた要素によっては、時間あるいは本当の持続をつくることはできないということ、つまり二つの多様性を区別しなければならないということです。以上が1点目です。

無限小について

ここから少し別の話題に移りたいと思います。空間に無限小がないという考えは古いのではないかというご指摘がありました。確かに数学的にはそのとおりかもしれない

す。すごくラフな回答しかできないのですが、時代や時期的な制約が大きかったはずだ、というのがひとまずのお答えになるかと思います。私の把握している限り、ベルクソンが数学をそれなりに勉強していたのは、哲学をやると決める前、幾何学の証明で少し名を挙げたこともあった時期と、先ほども話題に挙がった相対論を理解するために、おそらくその前に一定期間勉強したであろうということぐらいで、この講義はそれ以前の時期にあたるので、時代的あるいはベルクソン個人の中でも時期的な制約が大きかったと言えると思います。

こちらのほうが重要なのですが、森田さんが引用してくださった箇所で問題となっているのは、数学における無限小概念そのものというよりは、そこから着想を得た形而上学の観点だという点には注意が必要です。ベルクソンはこれを「形而上学的な心理学」と呼んでいます。ここでも先ほどプロティノスで出てきた心理学です。数学そのものと形而上学を彼はたびたび区別しているので、この点を押さえておくことは重要です。

その上で最後に、動力学は持続を扱っているのかというご質問があったと思います。この辺りのベルクソンの議論がどの程度、動力学や無限小の歴史の文脈で評価しうるものなのかということについては、私には判断ができませんので、今回は、ベルクソンがベネデッティの議論を念頭に置きつつ言いたかったであろうことを私の責任で説明してみたいと思います。

ベルクソンは動力学や無限小概念に関連する発想に、運動には内部がある——ここで内部というのは心理的な状態のことです——という自分の形而上学的な主張を重ねていると考えることができると思います。

少し長いですが、引用します。「この〔形而上学的〕観点では直線を意図として考えなければなりません〔…〕。さて、点すなわち動体を、ある時点において〔…〕とりあげ、その直線を空間内で考えるなら、明らかにその動体は一つの方向しか取り得ません。点は必然的にどれか一つの直線上にあるわけですが、しかし持続のうちに身を置き、動体をもつ内的なものを考えるなら、その動体が二つ、ひいては複数の異なる方向、二つの異なる意図をもつことが可能です。心理学的生とはそうしたものから成っています」（275頁）。先ほど説明したように、空間においては要素が相互外在的ですが、持続においては相互浸透できるということです。

先ほどは感覚とその記憶という、非常に単純なケースを例にしましたが、ベルクソンはその他の心理状態についても同じように捉えていて、ここでは意図というものが相互

浸透しているような状態を考えようと言っているということです。

そうした意味での物体の内部状態とはいかなるものか、物が意識を持つとしたらそれはどんな状態か、というのがここで議論されている事柄です。この引用では、単に直線としか言われていないですが、ベルクソンにとっては、ただの直線では駄目で、実際取り上げているのは曲線の接線です。それが次の引用です。

講義録の 275 頁の図を見てください。ここで、楕円の接線が取り上げられています。楕円とは二つの焦点からの距離の和が一定な点の集合ですが、ベルクソンは楕円を描くような動体 M を考えています。図の M です。この M が運動することによって楕円が生成してくるということが考えられています。引用します。「この動体の意図は、互いに等しい二つの線、MS' と MS" によって表象できます […]。二つの意図が幾何学的にひとつになっているとするなら、それは角 S' MS" を二等分する線によって表示されます […]。私たちとしては点 M の意図、点 M の方向は、その点で楕円に接する接線と呼ばれるべきものによって表示されていると言いたいと思います。それゆえ、曲線が描かれる運動がもつ内部を考えるなら、点は実在的には決して曲線上にいるわけではなく、常に曲線の接線上にいるのだ、と言うことができるのです。持続においては接線しか実在的なものはないわけですから、持続においてはそれこそが実在そのものです」。

要するに、楕円を描く運動体 M になってみたら、そこではどんな心的な状態が与えられるかということが問題となっていて、ベルクソンの考えとしては、そこには S と S" の両方に向かいたい二つの意図が混ざり合った状態、相互浸透した状態があるだろうということです。

まとめると、楕円の接線が二つの方向を潜在的に内包している事態が、持続において複数の動機が相互浸透していることに比較されています。科学も、こうした無限小や動力学の根っこにある着想の観点からであれば持続を捉えていたのですが、その後の記法の整備などによって、徐々に持続が排除されてしまう方向に向かったのではないかというのが、ここでのベルクソンによる歴史の見立てです。こうした見立ては、ちょうど、最初は内的エネルギーという形で意識をきちんと捉えていたプロティノスが、次第にそれを概念によって馴致してしまう方向に向かっていったのだ、という主張と同じ向きのものだと私は思います。

私からは以上で、また平井さんにつなぎたいと思います。それではよろしく申し上げます。

リプライ 平井靖史

○藤田 では平井さん、時間が少し押ししていますが、この後の議論の流れを考えると、ある程度の時間を取ってしっかりリプライをしていただいたほうが良いと思います。よろしくをお願いします。

○平井 では少し問題を切っていきます。僕は六つ用意してきたのですが、現代の時間形而上学と関係する論点が三つありますので、そこを中心に話したいと思います¹。

時制の存在	過去	現在	未来
永久主義	○	○	○
成長ブロック宇宙説	○	○	×
現在主義	×	○	×
ベルクソン	△	○	×

先にベルクソンの立場を、現代の議論地図のなかに位置付けておくと、過去、現在、未来、全部が存在している「永久主義」と、現在しか存在しないという「現在主義」、過去と現在が存在する「成長ブロック宇宙説」があります。それに対して、ベルクソンはどこなのだという、まず未来はなく現在はあるのですが、過去を三角にしてあります。これで僕は、「ハイブリッド成長宇宙説」という言い方をして、成長ブロック宇宙の「ブロック」に斜線を引いて、ブロックではない形で過去を認めるという議論になっています。それがどういうことなのかは、運動の不可分性と絶対的現在の立ち位置から見えてくると思うので、その話をします²。

ただ入る前に、近代科学の時間に対する評価について一言だけ言っておきます。先ほど森田さんがおっしゃったように、実際に近代科学についても最終的にはベルクソンは

¹ 以下の内容は、科学研究費補助金（課題番号：19H01190）、福岡大学推奨研究プロジェクト（課題番号 197002）、同領域別研究チーム（課題番号 203004）の成果を含む。

² 無限小についての論点は時間の都合で省略した。ベルクソンが近代の科学にとって（ベルクソン自身にとって）重要と考えたのは時間の無限小についての捉え方である。「一つ目において、無限小は否定的な概念で、否定によって定義されています。それは、それほど小さい量を考えようともそれではないような量です。常にさらに先へ行かなければならないのです。それは与えられたあらゆる量よりもさらに小さい量であり、否定的なものなのです。もう一つの考え方では、無限小は何か肯定的・積極的（positif）なもの、おそらくはもっとも肯定的である何か存在するものとなります。それは大きさを生み出すもの、量を生み出すものなのです」（272 頁）。

辛口でして、この後の5年後に書かれる『創造的進化』の最後に付いている哲学史の話では、近代科学も、古代と別な形で結局は時間を空間化しているという位置付けに落ち着くのですが³、今回の講義では、最初に藤田さんもおっしゃったように、「近代前夜」で微積分を発明するまでのプロセスにおいて、僕たちが名前も知らなかったような数学者たちが非常に形而上学的な思索をしている。先ほど岡嶋さんが考えてくださったように、運動に「内部」があって、それがあつた方向に「向かおうとしている」とか、そういったことを何とか数学に落とし込もうとすることに当時の学者たちが格闘していたのだけれども、それが近代にライプニッツとかニュートンが記法をつくって定着することで、結局その直観は形骸化していくという評価になっていると思います。ですので、これを読まれたときにどちらなのだと混乱されたのは、そういうところがあるかと思いました。

ただ僕は、この講義の面白いところはまさにそのスリリングな読みというか、ライプニッツがそれを出してくる前に、ニュートンの師であるバローとか先ほどのベネデッティとかがこんなことをやっていたという風にベルクソンが読んでいたという、そこが面白いと思いました。

運動が不可分であるとはどういうことか

それでは、ここから本論といいますか、内容に関係する話に行こうと思います。まず一つの運動の範囲はどこからどこまでなのか、弓をつがえたところからなのかどうかという問題、それは恣意的になるのではないかという森田さんの疑問に対して、これははっきり答えられると思います。ベルクソンは、実在的な運動というものとはきちんと具体的な要素で構成されていることを考えていて、実在の、つまり世界の側にリアルな分節（アーティキュレーション）があります。ですが、まさにそれ故に任意の分割は不可能だと言うのです。つまり、ベルクソンが分割不可能というときの分割は、外から観察者が勝手に分割するということを念頭に置いていて、現実に行進しているプロセスとしての運動からそれがずれてしまっているということを指摘しているのです。彼は無限分割をよく批判しますが、無限分割をするというと、まぐれ当たりを除けば、ほとんどの場合は恣意的、つまり実在の分割と疎遠な、無縁な分割になってしまいます。実在の分

³ 注4を参照。

割とは何のことかというのは分かりにくいのですが、それを今日は分かりやすく説明できるようにしたいと思います。

しかし実際には、アキレスの歩みの各々は単純で分割不能な働きであり、これらの働きが一定数あった後には、アキレスは亀を追い越していることだろう。エレア派の人々の錯誤は、彼らが、不可分で独特なあの一連の働きを、その下に張り渡された等質的空間と同一視している点に由来する。(DI, 84[128])

まず引用しておいたのは『試論』からで、そこでアキレスの歩みは一個一個が単純だと述べています。アキレスの歩み全体が単純と言っているのではなくて、一歩一歩、「歩み」(pas)は分割が不可能で、その一連の働きが重なっていくという言い方をしています。

現実には、動くものが a から b に至る運動は、具体的な何かです。それは一飛びに空間 ab を踏破する矢であるかもしれませんが、空間 ab を踏破する歩行者であるかもしれません。10 回で、15 回で、あるいは 10 歩ないし 15 歩で横切るかもしれません。それが何であってもいいのですが、とにかく何かがあるのです。それは一定の仕方では分節化され、有機組織化された、ある一つの運動です。私にこの分節、この有機組織化が与えられれば、必ずや、そのたびごとに、一定数の不可分の行為があるのですから、私たちは運動というものを、このような仕方では構成されたものとして捉えなければならないでしょう。(104 頁) Cf. 「解説」註 16 (426 頁)

それから、僕たちの訳したコレージュ・ド・フランス講義でも、15 回とか 10 回とか、そういう具体的な何かで一定数の不可分の行為があると述べています。これが全部べたっと一つの連続ではなくて、きちんと一歩という歩みの具体的なものによって構成されているという考え方になっています⁴。

⁴ これに対して、近代においては、「時間がそれを満たす物質に応じて客観的に分割されることはない。時間は自然な分節を持たないのである。われわれは好きなように時間を分割できるし、またそうすべきである」(EC, 331[419])という形で、時間が等質化されることになる。

そこから運動が「分割不可能である」ということをどうやって出しているのかは確かに見て取りにくいところです。これを僕が再構成してアーギュメントの形にしてみたので——これは2015年に森田さんとイベントで1回使ったことがあるのですが⁵——お示しします。

「分割」概念からの議論（平井による再構成）

1. 分割とは、全体を部分に分けることである。
2. したがって運動の分割のためには、これから分割する運動の全体が与えられる必要がある。
3. 運動の全体が与えられるのは、運動が終わった時である。
4. 運動が終わった時、まさに運動は運動であることをやめている（記号化されている）。
5. それゆえ運動は、進行中は全体が与えられないため分割されず、完了して全体が与える時にはもはや運動ではないため分割されない。

まず分割は何をすることかという、全体を部分に分けることです。全体がないとできません。分割する相手として、全体が要るということです。次に運動の全体は何だということです。運動の全体はいつになったら与えられるのでしょうか。運動が終わったときです。ところが運動が終わったときは、まさに運動は運動であることをやめています。未完了としての動きをやめています。動性を失っています。だから逆に運動が終わっても運動があると思っているということは、つまり分割できるとしているときには、必然的に運動はすでに何か記号に置き換えられた、空間に投射された、ベルクソンなら空間化されたと言う、そういうものにすり替わっているはずだということです。ここで置き換えの虚偽が起きています。

まとめると、運動は未完了（進行中）のうち全体が与えられないため、分割されません。完了すると、もはや運動でないため、分割されません。したがって、いずれにし

⁵ 「因果・時間・同時性」、日本科学哲学会第48回大会WS「哲学的時間論と物理学における時間について」、首都大学東京、2015年11月22日。

ろ分割されません。こういう議論として再構成できて、まさに運動とは「運動しつつあること」だという、このことを分割できなさの議論で彼が描こうとしているのが分かりやすくなるかと思いました。

そこで話を戻すと、実在はきちんと特定の仕方では構成されていて、それを事後的には、つまりいったん空間化すれば恣意的にどこでも分割はできるのですが、それは表象の話に置き換わっています。動きつつある運動そのものではなくなっています。

まったく記号的な要素だけを操作して、事物を再構成するという考えは、いちじるしい不合理を含んでいる。目の前にあるのが事物の部分ではなく、いってみれば記号の部分であることを知ったなら、そんな考えは誰の頭にも浮かばないだろう。両者ともに、部分的な記号を実在の部分と考え、分析の視点と直観の視点を混同している。(PM, 191-3)

これは『思考と動き』からの引用ですが、実在と記号の取り違えが起きており、分割しているときは記号になっているという引用です。

持続については、事情はまったく異なる。われわれの持続の部分の数は、持続を分割していく作用の時点の数と同じである。われわれが持続に瞬間をいくつか固定するならば、持続はそれと同じだけの部分をもつことになる。そして、われわれの意識がある間隔内にもう一定数の要素的作用しか見分けることができなくなり、どこかで分割を停止するならば、分割可能性もまたそこで止まる。(MM, 232 [299])

こちらは『物質と記憶』からの引用で、次の話につながるのでコメントしておく、持続はきちんと部分があると言っています。それは、ある間隔内に一定数の要素的作用しか見分けることができなくなっていて、どこかで分割を停止するならば分割可能性もそこで止まる、つまり現実の分割が分割であって、分割可能性はそれに依存しています。記号に置き換えれば分割可能性は先に進めるのですが、現実はそこで終わるという感じですか。

この考え方は、彼の時間論のすごく核になるアイデアだと僕は思っていて、それは「時間分解能」という考え方です。時間をどこまで分割できるかというのは個々のシス

テムに相対的⁶です。この宇宙の時間という大きいものを持ってきて、それが「無限分割できるのかできないのか」というグローバルな話ではなくて、どこまで分割できるかはそれぞれのローカルなシステムに内的に決まってくるのだ、と。つまりシステムが違えば、最小の時間単位の大きさ、一番小さい瞬間のサイズ、分割可能性のサイズも変わってきます。これがベルクソンの持続の多元論と呼ばれる考え方で、その話に入っていきますが、その前にここでいったん森田さんの疑問に対して答えておきます。

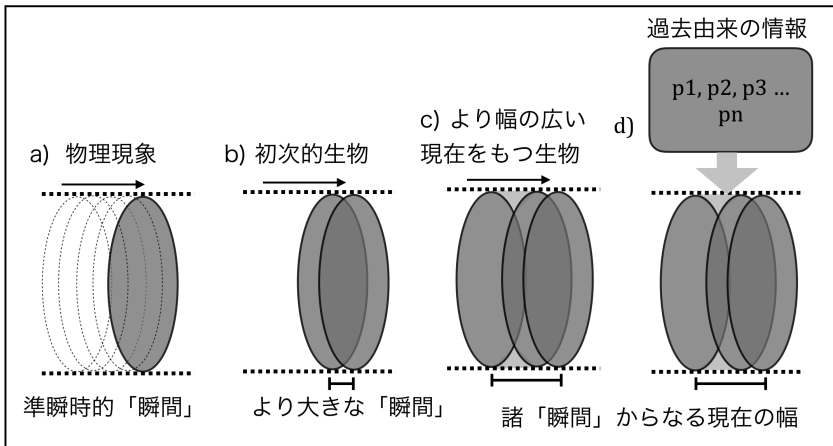
「時間と空間の混同と、時間・運動を複合的なものとして捉えることはイコールなのでしょうか」という問題に対しては、「運動が複合的」と森田さんがおっしゃっているときに、どういう意味で言っているかによると思います。それが〈運動が下位の運動から構成されている（実在の分節がある）〉という意味なら、今見てきたようにベルクソンはこれを認めているということです。他方で、〈運動が恣意的に分割可能〉という意味なら、それは時間と空間の混同に陥っている。つまり記号に置き換えてしまう、空間化してしまうことによってそれ（恣意的な分割）ができると錯覚することになります。このように整理してお答えできるかと思います。

ベルクソンのマルチスケール時間論（持続の多元論）

先ほど出てきた分解能が変わってくるというのは別の論文で書いたので⁶、今日はさらっとだけにしますが、ベルクソンは生物によって時間サイズが変わってくることを考えていまして、生物のことを「感覚-運動システム」(système sensori-moteur)と呼んでいまして、それが占める時間的な幅が次第に大きくなっていくという話をします。

人間はかなり大きいほうでして、ハエが区別できる蛍光灯の点滅をわれわれは区別できないとか車輪が回転しているとワゴンホイール効果が生じるとか、そういうことが知られています。マイクロ（微視的）な生物では物理的な作用・反作用レベルで生きているのですが、われわれはもっとマクロ（巨視的）になっています。そういうのをまずベルクソンは描くのです。

⁶ 平井靖史「「スケールに固有」なものとしての時間経験と心の諸問題——ベルクソン〈意識の遅延テーゼ〉から」in 森田邦久編『〈現在〉という謎 時間の空間化批判』勁草書房、第6章 (pp. 205-224)。



実在のことを、こうして複数の持続によって構成されるものと見なすなら——私は先ほど二つの持続、私の持続と物質の持続とについて語りましたが、物質と私のあいだには中間的な存在を数多く想定することは可能ですし、そうする必要があります。…そうした持続のすべては、数において無限の、無際限の持続であり、隣り合いひしめき合っています。人が唯一の時間 (temps unique) と呼ぶところのものはと言えば、それはひとつの数であって、単なる数え方 [numération 記数法]、いくつかの同時性の数え方として表象されるべきものです。(253-254 頁、下線強調引用者)

そうすると、どういう描像が出てくるかという、上の引用にあるように、物質の持続があってそちらはミクロスケールです。人間はマクロです。いろんな生物がいるので、その間にもいっぱいあります。そうすると、それぞれの持続の全ては無際限なスケールがそこここにあって、それがひしめき合っているのですという時間像になってきます。同じ統一された最小単位でつくられた、あるいは最小単位のない無限分割可能な連続でできている時間によって宇宙を説明するのではなくて、非常にローカルに、そこかしこにいろんなスケールの違う時間がひしめき合っているという、しかも階層になっています。

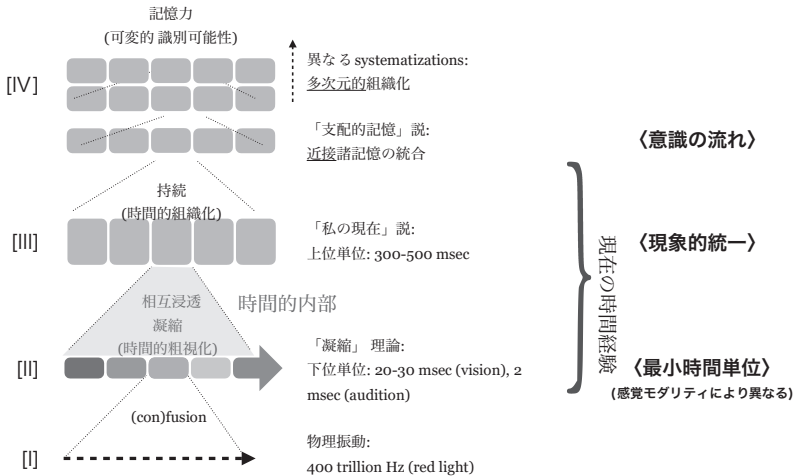
そうすると、引用末尾に出てくる「唯一の時間」——これを「等質的時間」とも言い、普通に人が時間座標などで考えているもののことを指しています——、そういうもの

は、記号化された、空間化された時間ということになります。ベルクソンは、世界をつくっている時間の描像を非常に凸凹なというか、いびつな、そこかしこでローカルにサイズが違うものとして、しかもそれがミルフィーユのように重なったものとして描きます。

運動は恣意的に分割できないというのは、こう考えられると思います。豚肉と白菜が僕は好きですが、寒いと豚肉と白菜で重ね蒸しを作るんです。これを少しずつ重ねていきます。縁が全然そろいません。白菜の縁とお肉の縁が一致しません。ざくっと切ると、必ずどれか、ももとの肉の切れ目ではないところ、あるいは白菜の切れ目ではないところで切ることになってしまいますよね。これが恣意的な分割が不可能だということです。異なるサイズからなる時間像をこういうふうに描くので——いわばミルフィーユ世界時間なので——、縦に切ると、必ず実在の分節でないところで切ってしまうことになります。

マルチスケール時間論 (持続の多元論)

平井(2019)「「スケールに固有な」ものとしての時間経験と心の諸問題」 in 森田邦久編『〈現在〉という謎』、205-224頁。



人間の場合をベルクソンが論じているものでピックアップしていくと、まず物理的振動で光の例とかを出すのですが、人間の最小時間分解能は——ベルクソンはこれを間違って聴覚の2ミリ秒をエクサナーから引いています——、実際は視覚は20ミリ秒

ぐらいです。その上に「現在の幅」があって、300-500 ミリ秒という値は現在知られているものから持ってきましたが、ベルクソンは感覚－運動ループの1 サイクルぐらいを考えています。

その上に支配的記憶という言い方があるのですが、出来事を幾らかでチャンク化して、一つのまとまりにします。上にどんどん行って、私の人格があって、さらに上とかも考えるのですが、こういうふう具体的に時間が、そこでどういシステムが相互作用しているかを見ることによって全然違う時間スケールになっています。そういうものがリアルに重なっているという考え方です。

では上の端はどうなっているのかということが「永遠」に関係するので、『思考と動き』から引用しておきます。

逆の方向に歩むと、私たちはますます緊張し、収縮し、強度を高める持続に向かっていくことになる。極限にあるのは、永遠であろう。しかしそれは概念的な永遠、つまり死の永遠ではなく、生の永遠である。それは生きているがゆえに動いてやまない永遠である。そこにおいて、私たちの持続は光のなかの振動のようなものとなる。(PM210)

上の極端もあって、全てが凝縮されているような時間を考えることもできるでしょうと述べています。今回の講義録ではここです。

私を超えたところに〔私の持続よりも〕より緊張した持続はないと想定するいかなる理由もありませんし、〔逆に〕そうした持続が存在すると想定する強力な理由さえあります。それに加えて、高次の秩序に属するこうした諸々の持続の存在を前提として、無際限とは言いませんが非常に大きな弛緩から、完全な集中に至るまでの、諸持続のさらに完璧な連続性を認める強力な理由があるのです。(253-254 頁)

「私たちの持続よりもより緊張した持続」、さらに上の階層です。そういうものを推定する理由さえあるのですと、少し押しが強くなってきていませんか。それぐらい階層性をはっきり考えている形になります。そうすると、先ほどの時間論の分類の話で、なぜ過去の実在が△になるのか分かるのではないかと思います。

絶対的現在は存在するか

「絶対的現在」という言葉は多義的だと思います。一方で、それが普遍的、つまりどこでも宇宙全体に1個だけ当てはまる一つの唯一の本当の現在という意味でなら、ベルクソンは認めないですが、客観的、つまり存在論的というか、単なる錯覚ではないという意味では認めています。

さらに大事なのは、先ほどのミルフィーユのようになっていて、下が小さくて上が大きいものまでピンキリなので、そうすると、時制の区別がシステムに相対的になります。スケールによって相対的になります。電磁波にとっては、ミクロの時間スケールにとっては最新の振動に先立つ諸振動はすでに過去ですが、それを凝縮している私たちにとってはどうか。私たちににとっての一瞬、つまり20ミリ秒だけライトが光ったら赤だと分かるわけです。そのときに含まれている赤の中に（ミクロで言う）「過去」が含まれてしまっているということです。その過去は、私たちににとってはこれが最小分解可能な単位なので、「現在」としか言いようがありません。だから下のスケールにとっては過去であるものが上のスケールにとっては現在であって、過去か現在かはどのスケールの話をしているかで答えが変わってくるのです。しかもどちらが正解ということがないのは、実際にマルチスケールをリアルに考えているので、そういう排他的な捉え方はなくなります。

最後の論点⁷は別な論点になるから、ここで僕は終わりにします。

○藤田 ありがとうございます。少し休憩してから全体討議に入ることに致しましょう。

(休憩)

全体討論

○藤田 では、そろそろ再開致します。まず流れとしては最初に青山さん、森田さんから岡嶋さん、平井さんのリプライに対して何かコメントないし付け加えておっしゃりたいことがあればまずそれを確認することにして、その後で会場にオープンに開いていく

⁷「今」の特権性と法則性のトレードオフについて。別な機会を期したい。

感じにしましょうか。

では、まず青山さんからお願いします。

○青山 コメントへのリプライを頂き、ありがとうございます。岡嶋さんのリプライで、ベルクソンが心理学的な持続の分析という側面をプロティノスから引き継いだというところ、それから、平井さんのリプライで言われた意味での「形而上学」と「聴診」との関係、これらについてよく理解できました。また、時間の系列性がどこから出てくるのかという論点、これについては平井さんのリプライの最後の部分をもっとじっくり聞きたかったのですが、とくに、意識が物質から出てくるというお話——これは『物質と記憶』の要点をまとめてくださったものだと思いますが——と時間の系列性がどこから出てくるのかという論点とのつながりに関心があります。

○藤田 今の系列性というところはすごく大事なポイントだと思います。

○青山 物質のほうがマイクロであり、いわばベースになっていると考えるとき、物質の世界にはあらかじめ、何らかの時間の系列性があるはずです。しかし、「一者」をベースとした場合——アウグスティヌスが「永遠」から時制（過去・現在・未来）をひき出そうとしたという話はあったのですが——そこから時制だけでなく系列性までつくるのはまた大変なことなので、この点についてはどうでしょうか。つまり、一者の永遠に、系列性はあるのかという問いかけです。

○平井 なるほど、それは僕からお答えしようと思います。もちろん僕はプロティノスの専門家ではなくて、古代全体についてもそうです。ベルクソンが理解した範囲のものを捉えているだけなので、本当は古代の専門家にお聞きしたいところです。その上で、おっしゃるとおり、一者は、僕の見聞きしている範囲では、そういう系列性を一切持たないはずのものなので、そこから系列を出してくるのは無理ゲーというか（笑）、無理なゲームをやっていると、それはどうしても外からの評価としてはそういう感じになってしまうのではないかと思います。

ただ一点、工夫としては、青山さんが引いてくださった注の4（424頁）のところで僕が書いたと思いますが、アリストテレスたちもそこら辺は分かっていて、天球という、動いていても動いていなくてもいつまでも一緒のような、動いているのですが、変わらないという、そういうものとして「球の回転」という運動を利用していますね。

○青山 平井さん、ありがとうございます。岡嶋さんにもお聞きしたいのですが、岡嶋さんから森田さんへのリプライのなかで、時計の絵を使った系列性の説明がありまし

た。あれは、フッサール風の考えだと思うのですが——。

○岡嶋 そうですね。

○青山 あの説明の図式では持続から出発する観点をとっており、それはもちろんベルクソンの観点です。他方で、素材としての物質に目を向けると、物質からの出発と言える観点もベルクソンにはある——。このことは、時間の系列性に関しても同じだと思うのですが、ここでの二つの観点の橋渡しがやはり気になります。岡嶋さんのあの図での説明は、現象の持続の側からスタートして時間の系列性をつくるという話になっていますね。

○岡嶋 そうですね。

○青山 SやS'などが積み重なっていくという、フッサールの「内的時間意識」の説明に似たものです。そこで考えてみたいのですが、内的な持続から系列をつくった場合と、ミクロな物質の側にそもそもあるはずの系列を捉えた場合とで、それぞれの系列がずれることがありうる——あってよい——と思うのですが、どうでしょうか。

○岡嶋 今ぱっとお答えできる問題ではないのですが、ずれていいとは思いますが。おそらく、その問題を考える際に重要になるのは、時間意識から構成される系列性は、記憶の系列性に由来するものだという点です。ベルクソンは、『試論』では図を描いていないですが、『物質と記憶』ではまさに線として記憶を表しているような箇所もあって、先ほど平井さんがちょうど紹介されていた伊佐敷先生の論文では、そうした矛盾をどう理解すべきかということが議論されていました。

ベルクソンは記憶が日付を持つということをよく強調するんですね。日付は時間の順序を前提とするので、過去それ自体が存在するというあの有名な主張についても、その過去はそれ自体で一定の順序を持っているのだ、というように解釈することも可能だと考えています。ただ、難しいのは、どのようにして記憶がそれ自体で日付けや系列性をもちうるのか、という点です。

私がいまのところ考えているのは次のような解釈方針です。ベルクソンにとって過去というのは絶えず積み重なるように保存されていくものです。そして彼は、逆円錐の図に示されるように、そうした過去の全体によって、意識される現在の大部分が構成されるという議論をしています。そうすると、今この瞬間に構成された現在は、ある意味ではそれ以前の過去の全てのデータを持っているということが出来る。別の瞬間に構成された現在は、当然、異なるデータをもっていることになる。そういう観点からすると、

どれぐらい過去の量を持っているかによって、ある程度順序を構成するような形で過去の記憶を並べることができるのではないかと考えています。もちろん、こうした考え方を擁護するためには、いろいろクリアしなければならぬ解釈上の問題がありますし、さらにこうした発想を現代的な観点にどう位置付けるのかというのも難しいところですが、今後扱われるべき論点のひとつであることはたしかです。

○青山 分かりました。ありがとうございます。

○藤田 分かりました。では、森田さん、お願いします。

○森田 リプライ、ありがとうございます。どう近代科学を評価していたかという話については、だいぶすっきりしました。ありがとうございます。

不可分な時間の話ですが、もちろんベルクソンとしては、何か単位があると主張すると思いますが、その要点は、結局、恣意的にならざるを得ないのではないかとということで、先ほどのお二人の話聞いても、僕の理解が正しかったら、例えば意識のスケールの段階を見たときに、ある程度分割できる最小単位のようなものがあってということだと思いますが、それも結局、恣意的だと思います。

少し話がずれるかもしれないですが、青山さんの話と無理やりつなげると、ベルクソンは「持続から出発する」と言ったのですが、むしろプロティノス的に考えたほうがいいのではないのでしょうか。やはり一つの、ばーんと永遠的なものがあって、そこから意識でスケールするのだったら、意識に下りてくることによって全体として一つの運動でしかなかったものが何かの最小単位の運動として捉えられると思ったほうが、そう言われたほうが、僕たちが意識で捉えている時間は本当の時間ではないのだと言われたほうが僕としてはすっきりするかと思います。どうでしょうか。

○平井 そこはベルクソン研究者の間でも解釈が分かれている可能性はあるということはあると言っておかなければいけないですが、僕の解釈するベルクソンとしては、確かに『試論』のベルクソンは結構人間論的というか、意識と物質世界と分けているのですが、青山さんへのコメントで僕がリプライで言いましたように、最終的には、結局、世界から意識を出してこない、直観という世界とのつながりが全部切れてしまう。意識で話してしまうと独我論になってしまうから、こちらで「持続があります」と言っても、結局、世界と関係ないのかという話になってしまうので、そこをつなげるという発想に、『物質と記憶』からはかなり自覚的に——『試論』でもその萌芽が見られるのですが——、なってきたいて、その意識をどうやってつくるかといったときにスケールでつくって

るという発想に至ったと思います。

だから意識のスケールといったときに、僕は物理世界と別個にこちらのメンタルの世界の中で勝手にできている、恣意的にできているようなスケールの話ではなくて、本当に相互作用する生物の身体システムの条件としてそういうものを持ってきていて、そうやって世界の側から、下からつくっていく。そのスケールが上がるのは、単に大きさが変わるだけではなくて、モデルを作ったりするので、そうすると、世界の書き換えが起こるわけです。相互作用するときの相互作用の単位の書き換えが。

そうやって相互作用というレイヤーに注目するわけです。「恣意的」という言葉に僕はすごく引掛かかっていて、恣意的とはどこでも切れることを意味すると思います。ベルクソンは、階層ごとに切り方が違ってどれも正解という立場になるので、普通に思っている人よりもだいぶ多く切っていることになると思いますが、やはり恣意的ではなくて、その階層でそう切る理由がシステムの側に内在的にあるんですね。その相互作用のサイズがあるから、人間の現在経験のスケールの話をしているときに、例えばマイクロ秒とかの単位を持つてくるのは無意味ですし、逆に年という単位は大き過ぎて僕たちは変化として知覚できません。そういう適切なスケールはあるので、そういうものはシステムの側の要求として決まってくるところがあるので、恣意的、つまりいつでもどこでもどんなふうにもでも切れるという意味での恣意的は成り立たないようになっているのではないかと僕は考えているのです。

○森田 そうだとすると、人間というシステムでの限界、あくまで人間としてのシステムの限界なわけですよ。

○平井 ほかの生物も想定していて、実際にそういう相互作用しかこの世界では起きていないので、その相互作用があるだけあるという感じです。ハエがいると、ハエの時間、ハエの相互作用は僕のすぐ隣でハエがブーンといっているけど、その時間スケールは僕と違いますし、僕自身にとっても大腸菌の時間スケールと違ったり、そういったものは入れ子になっていたりします。ある分が全部あるのですが、その中からどれかが恣意的に本当だと言っているわけではないという、そんな感じです。

○森田 でも、そうだとすると、無限分割できないのは、同じことの繰り返しになるけれども、あくまで人間というシステムであって、ゼノンのパラドックスを考えているときは、人間というシステムの中で考えているわけではないですよ。

○平井 なるほど、それは面白いですね。だから無限分割できるような知性が存在すれ

ば起きるということですね。そこで相互作用をするので、世界に対してわれわれよりもはるかに高い、無限に分割できるような相互作用があれば可能だということですね。

○森田 それもそうだし、その話だと、結局、時間は何らかのシステムの外に考えられるものではなくて、あくまでシステムの中でないと考えられないと思うべきということですかね。

○平井 そうですね。

○森田 でも運動、ゼノンのアキレスが亀を追い掛けたりしているのは、システムの外にはアキレスが亀を追い掛けているという運動はそもそも存在しないと。

○平井 そういうシステムがあるのはどこ目線で言えるのかというメタ的な問いですかね、なるほど。

（以下、会場との質疑のため略）